

健康新聞

発行所 日本患者同盟
 郵便番号 610-1144
 所在 京都市西京区大原野東竹の里町
 1-1-2-301
 電話 075 (331) 5220
 昭和25年7月19日
 第三種郵便物認可 **2083号**

日本患者同盟、二〇一六年度で解散

—— 昨年一二月末の役員会で決定 ——

本紙もこの二〇八三号が最終号

日本患者同盟は、昨
 二〇一六年二月二十九日
 に東京清瀬の本部事務
 所で開催した役員会で、
 二〇一六年度いっぱいでの
 解散を確認決定しました。

(東京)、松良寿美子(東
 京)、会計の石垣雅之(東
 京、顧問の寺脇隆夫(編
 集部)の現行役員全員で
 した。

①一二月一杯で事務所、
 会館は閉鎖、②年明け後
 年度内二月頃までに建物
 解体、残務整理、③解体
 費用の見積確認、④解散
 の関係先への挨拶(健康
 新聞)に掲載)などに
 つき、決定されました。

当日の役員会の出席者
 は、会長の小澤依子(京
 都)のほか、副会長の竹
 村公子(大阪)、蝦名武明

会議の議題は、懸案の
 日患同盟の解散について
 でしたが、すでに前回の
 役員会で解散の件がほぼ
 内定していたこともあり、

以上のような事情から

本紙も、本二〇八三号が
 最終号となります。

役員会終了後、会長他

が、関係地主に挨拶に向
 うことも確認されました。

会議室についての近隣

の友好団体などの使用・
 貸出しも年内一杯で打ち
 切ることとなりました。

本部事務局(建物)につ
 いても、二〇一七年一

二月中に、事務所建物を
 とりこわし、借地であつ
 た土地については、地主
 に返還することなどが確
 認されました。

その後、二〇一七年一
 月一日には解体業者に
 よる事務所建物を含む会
 館の取り壊し工事が開始
 されました。

工事が終了後、二月中
 には、地主への返還が完
 了する予定です。



上に掲げた、本部事務所正面の写真は、
 解体工事の着工寸前の本年1月10日
 に撮影したものです。
 古いフィルムで暗くなってしまい、申
 し訳ありません。すでに存在していな
 いもので、最後の写真です。

日本患者同盟は六十八年の歴史を閉じます

長年のご協力、有難うございました

日本患者同盟 会長 小澤 依子

と厚生省に請願していた
新抗結核薬「テルティバ」
が承認され、保険適用に
なりました。

て参りました。

▼組織の維持困難

しかし、近年の結核患者の減少は、喜ばしいことですが、日患同盟の組織にとつては困難な状況をもたらしています。

それは、日患同盟の会員の大幅減少につながったからです。組織面での役員の死亡、高齢化、病気等による退任などにも及んでいます。

その結果、残念ながら組織の維持が困難になってしまいました。

▼年度内の解散

ここに平成28(二〇一六)年度内をもち、日本患者同盟を解散することに致します。

長年のご指導、ご鞭撻ご協力に心より御礼を申し上げます。

有難うございました。

昭和23(一九四八)年、戦後の極端な食糧難で巷間一億餓死説がながれ、結核は不治の病気、亡国病と言われた。

入院結核患者や当時の先輩方が、血と涙の中、あらゆる妨害を乗り越えて、「生命と生活を守るため」に、日本患者同盟(略称・日患同盟)を誕生させました。

この日本に、患者団体・障害者団体などが何一つない無権利時代のごことです。

厚生省(当時)発表で昭和28(一九五三)年の結核患者は五百万人を超え、患者を出すことでその一

家は離散、没落、一家心中など、結核は大きな悲劇を生みました。

その後全国的に日患同盟の支部が出来、患者の相談、社会保障の向上のために、厚生省、各病院療養所交渉などで、数え切れない運動成果を挙げました。

▼朝日訴訟の成果

日患同盟の歴史の中で、「朝日訴訟」(昭和32〜42年)は大きなたたかいでした。

朝日茂さんが日患同盟の全面的な支援を受けて、当時の厚生大臣を相手として、東京地方裁判所に

提訴し、生活保護をめぐる裁判闘争をたたかいました。

その結果は、生活保護基準引上げの大きな契機となりました。さらに、今なお「人間裁判」として、生活保障運動の精神は、継承されています。

▼結核特效薬使用

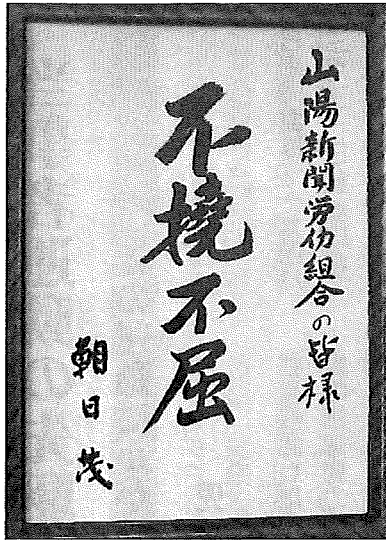
思えば、結核特效薬ストレプトマイシン(昭和24年)、リファンピシン(昭和46年)などが使われるようになり、患者は激減、歓喜したものです。

最近でも平成26(二〇一四)年、常々新薬開発を

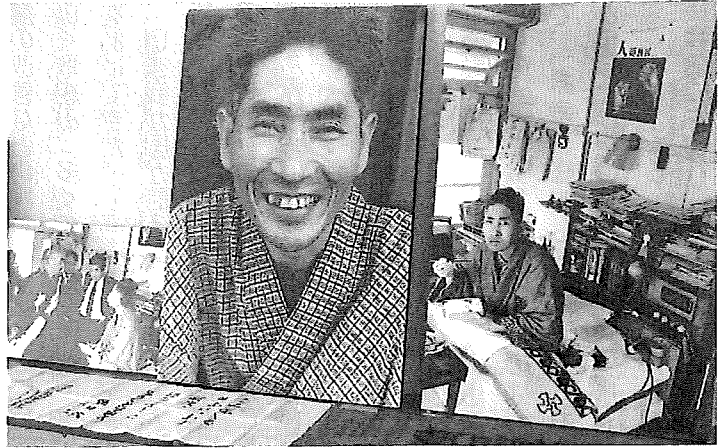
▼患者自身の運動

振り返って思いますと、患者自身が立ち上がり、団結し、要求をかかげて運動すれば、必ず「展望」が開け、「成果」があらがることを学びました。

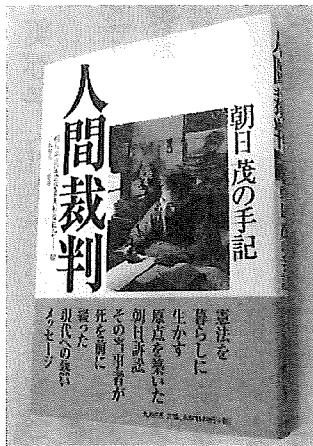
教訓を受け継ぎ、様々な困難や障害に負けず、皆様の支えで運動を続け



朝日茂さんの書「不撓不屈」



病床の朝日茂さん



「朝日茂の手記／人間裁判」



「人間裁判」の碑の前で
(朝日健二さんと夫妻)

日本患者同盟六十八年のあゆみ(その①)

- 一九四五 (昭20) 日本敗戦、第二次世界大戦終了(8月)
この年の秋遅くから四七年にかけて、各地の療養所・病院で患者自治会が続々と誕生
- 〃四七 活動活潑化↓給食用食糧ピンハネ・物資横流し・悪徳管理者追放・民主化運動展開↓療養生改善・給食改善・医師看護婦増員・新薬輸入要求など
- 一九四七 (昭22) 全日本患者生活擁護同盟(日本医療団系・略称：全患)結成
国立療養所全国患者同盟(旧傷痍軍人療養所：国患)
全国国立病院患者同盟(旧陸海軍病院系・略称：国病)結成
- 一九四八 (昭23) 全患と国患を中心に合同「日本国立私立療養所患者同盟」誕生(3月)
(略称：当初から、日患同盟または日患)
(加盟団体二二〇施設、二万二二二四人)
- 同 機関紙『日患情報』創刊(4月)
- 同 名称を「日本療養所患者同盟」と改称(11月)
- 一九四九 機関紙『健康会議』(月刊)を創刊(3月)
- 同 同盟会館・事務所を東京清瀬に建設(6月)
- 一九五〇 名称を「日本患者同盟」と改称
- 一九五四 (昭29) 社会保障費大削減(とくに生活保護費の国庫負担削減)への反対運動

当事者運動の先駆：日本患者同盟

その運動にかかわった思い出

児島美都子（日本福祉大学名誉教授）

日患同盟は、一九四八年三月二日創設以後、

日常生活の改善、医療、看護そして、社会保障制度の改善などの課題に幅広く取組み、多くの成果をあげてきた。

いま我が国が誇る国民皆保険制度を実現させたのも患者運動の力に負うところが大きい。

その日患同盟が幕を閉じるにあたって、これまで運動を担ってこられた多くの方々に敬意を込めて、「お疲れ様でした」と申し上げたい。

戦前に生まれ、戦時中社会に出た私にとって、

戦後直面したのは一八〇度の価値観の転換であった。

国民主権を謳った新憲法、メーデー、米よこセデモ、労働組合運動、三九人に及ぶ女性国会議員の誕生など、そのすべてがこれまでの価値観を根底から覆すものであった。

私が当事者運動としての患者運動に出会ったのは、敗戦から六年目、一九五一年のこと。

ボランティアとしてかわっていた、東京の小さな胸郭外科病院内の患者会を通してのことであつた。

その後、病院の医療ソーシャルワーカーに採用された。

《思い出として残る二つのたたかい》

社会保障予算大削減反対の

都庁前座り込み

朝日訴訟第一審（東京地裁）での証言

一つは、一九五四年の

社会保障予算大削減反対のたたかい、そしてもう

一つは朝日行政訴訟である。

一九五四年、当時政権

を担っていた吉田内閣は社会保障予算の大削減を提案した。その背景には再軍備政策への転換があつた。

され、以後、医療ソーシャルワーカーとして、患者運動にかかわってきた。

日患同盟がその運動の幕を閉じるにあたって、二つのたたかひの記録を思い出として記しておきたい。

都道府県庁への座り込みは、岡山、愛媛、東京などから始まり、全国一六都道府県に及ぶ。

私は、自分の病院の患者さんの付き添いとして、東京都庁の座り込みに参加した。

次々に到着するバス、そのバスから次々に降り立つ白衣の患者たち、その患者たち二十人が東京都庁を二重三重に取り囲む。

圧巻であった。この事件はマスコミに大きく取り上げられ、患者運動は一躍市民に知られる存在になった。

（5面につづく）

この二通達とその背景

当事者運動の先駆…日本患者同盟 その運動にかかわった思い出から

児島 美都子

(4面からつづく)

もう一つは朝日訴訟。

それは第一審公判の朝日側証人を頼まれたことから始まった。

○ ○ ○

証言を依頼されたとき、私の胸の中には、「何故女の私が」「裁判所は怖いところ、できれば断りたい」という気持ちがあった。一度は断ったが、他に引き受けてがなかったことから、私が証言することになった。

私が朝日訴訟第一審公判の証言に立ったのは、一九五八年二月一日のことであった。

同じ日、社会保障学者として有名な末高信教授が国側証人として証言した。

○ ○ ○

末高教授は、「岩手県など東北の農村では、子供たちははだしで裸で歩き、用を足すのに木の葉などを使用している。それに比べて、生活保護法の日用品費には、ちり紙代月二〇〇枚分が計上されている例が示すように、健康で文化的な生活が保障されている」と陳腐な証言をした。

○ ○ ○

私は自分で行なった実態調査に基づいて、日用

品費がいかに実態とかけ離れているかを、実証的に証言した。

朝日側の証言者は多彩で、いづれも説得力のある証言であった。

○ ○ ○

周知のように、朝日訴訟第一審は、朝日側が勝利した。

第一審判決で、浅沼毅

判長は、「生活保護法が保障すべき健康で文化的な最低限度の生活とは、法的権利であり、人間が人間に値する人間らしい生活を保障するものでなければならぬ」と朝日側の勝訴を宣言した。

○ ○ ○

結核患者であり、生活保護受給者であった朝日さんの勝利は、同じような境遇にあった多くの人々を励ますとともに、生活保護法はお恵みでは

なく、権利であることを国民に教えた。

○ ○ ○

第二審は、「保護基準はすこぶる低額であるが違法とは言えない」という迷判決を残した。

○ ○ ○

その直後の朝日さん死亡により、裁判は養子となった朝日健二さんが裁判を引き継ぐことを求める承継権を争う裁判として継続された。

○ ○ ○

だが、最高裁が承継権は認められないとの判決を出したことにより、裁判は終結することとなった。

○ ○ ○

しかし、裁判は終わっても、運動は終わらなかった。岡山には、朝日訴訟の会が結成され、現在も地道な運動が続いている。

○ ○ ○

残念なことに、運動の中心的な役割を果たしてこられた朝日健二さんは、一昨年九月に急逝された。

○ ○ ○

このたび、日患同盟が解散することになったことは、残念ではあるが、日患同盟が創造し、築いた当事者運動は、いま多くの障害者団体や難病団体に引き継がれている。

○ ○ ○

その当事者運動が目指すのは、「人間が人間らしく人間に値する生活をすべての人に保障する社会を実現することである」と言えよう。

○ ○ ○

改めて日患同盟の運動とそれを支えてこられた多くの方々に、敬意を表してこの稿を終えたい。

日本福祉大学
名誉教授

私にとっての日患同盟

結核フォーラムとの出会い

竹林公子 (大阪府患)

この度、日本患者同盟を解散し、本部として使用してきた、日患会館を閉鎖することで六十八年間の歴史ある患者運動にも終止符が打たれます。知識もなく、日本患者同盟の存在すら知らなかった私が、大阪府患者同盟の事務局に籍を置くことになったのは平成に入ってからでした。

当時、日本患者同盟は結核問題の啓発・啓蒙運動の一環として、各地で結核フォーラムを開催しておりました。私が府患事務局に入つた翌年には、大阪での開催となり、府患の会員・事務局が一丸となってフォーラム成功を目指し奮

闘したものです。

当日、会場では結核予防会の元会長島尾先生の講演や各医療関係者と結核体験者のパネルディスカッションが行なわれ、結核への再認識を得る機会となりました。

日患会館を利用していただいた本当にありがとうございます

松良寿美子 (会館運営委員)

清瀬がお住まいで、活躍していらした生前の朝日健二さんから、声がかかり、日患会館の部屋を使用させていただきまし

一般参加者から「いいお話が聞けた」と声をかけられた時は、小躍りしたいほどでした。また、先輩達との活動内容、運動展開についての意見交換は教えられることも多く、思いついたものとなっております。この二〇年余りは、私にとって貴重な時間だったと思います。ありがとうございました。うございました。

『健康新聞』の読者でもあった、私も清瀬の最近では、健康マージ

ヤンなどもはじまり、楽しい時間を過ごさせていいただきました。その皆様の寄りどころだった場所で、最後の二年半余は、地元の私どもで利用させていただきました。ありがとうございました。私自身にとっては、長い間の日患の歴史について、想像くらいしか出て来ません。

日本患者同盟六十八年のあゆみ (その②)

- 一九五七 岡山療養所の朝日茂さん、生活保護基準低すぎと東京地裁に提訴 60年東京地裁訴えを認め勝訴 二審は敗訴 (63年)・上告 朝日さん死去 (64年)、養子に健二さん、訴訟を承継
- 一九六六 国立療養所へ特別会計制導入反対運動 (昭41) (48年以來一般会計で運営)、全国で展開
- 同 高知三柏園療養所で、交渉中の高知県患役員を不当逮捕事件 (11月)、以後裁判闘争
- 一九六七 身体障害者福祉法改正 (8・1公布)、内 (昭42) 部障害 (肺機能と心臓障害) を対象に
- 同 最高裁、朝日訴訟上告を棄却・承継認めず (昭43) 特別会計制移行法案、全医労・医労協との共闘、成果あがるが、法案は強行可決

『健康新聞』の歴史を振り返る その5

『療養新聞』の時期 / ③

この時期の『療養新聞』は、時代と日患同盟の活動状況を反映して、新聞としては充実した内容でした。

一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけては四頁、時には八頁のこともあり、記事は各県の活動や生活・医療・文化娯楽面も含め、豊富なものが見られます。

知県の浦戸湾に面した三柏園廃止に端を発した、日患同盟の不当逮捕事件のニュースが流れました。事件は長期にわたる裁判闘争となりましたが、

一三年に及ぶたたかひの結果、八〇年に高松高裁で全面勝訴します。

この六〇年代後半には朝日訴訟の最高裁での承継問題などもありました(敗訴により終結)。

さらに、日患同盟の要求だった身体障害者福祉法改正(67・8)問題があ

ります。国会成立前後の解説記事で、内部障害を対象に含めることをいねいに説明しています。

一九七〇年代に入った最初の年(70年)、日患同盟は、結核対策についての方針を体系的にまとめられています。(8面につづく)

日本患者同盟六十八年のあゆみ (その③)

- 一九七〇 「結核をなくすために」日患の意見と(昭45) 要求」をまとめ、7月の大会で発表
- 同 全国各地で「回復者の会」の組織結成進む
- 一九七一 低肺機能対策(低肺ベッド・病棟建設)の要求運動、全国各地に拡がる
- 一九七五 日患など各種の患者八団体で「全国患者団体連絡協議会(全患連)」を結成(昭50)
- 一九七六 低肺対策の運動で東京に初の施設「希望園」
- 一九七八 三十六種の患者団体・難病団体の協力で「全国患者家族集会」が開催される(昭53)
- 一九八〇 機関紙『療養新聞』、『健康新聞』に改称
- 同 高松高裁、三柏事件で全面勝訴判決

1966年11月15日 第761号

三柏園肉鎖に反対する患者を弾圧 三名を不当逮捕し10数名に重軽傷

結核ベットのまじりすて 高知県患者が憤りねらう

合理化 源正幸

日患同盟本部

三柏園事件 完全勝訴

やめた運動助けた

1967年7月25日 第786号

身体障害者福祉法改正 審議開始を待ちまう

三柏園事件 完全勝訴

みんなのよりに 日患同盟の活動への

日患加盟もさめる

百五十人学生春入學 日患が第三次中央行 四方の署名を提出

1969年5月 第790号

三柏園事件 完全勝訴

みんなのよりに 日患同盟の活動への

日患加盟もさめる

百五十人学生春入學 日患が第三次中央行 四方の署名を提出

1980年2月25日 第1242号

三柏園事件 完全勝訴

みんなのよりに 日患同盟の活動への

日患加盟もさめる

百五十人学生春入學 日患が第三次中央行 四方の署名を提出

『療養新聞』の時期

③

(7面からのつづき)

「結核をなくすために」日患の意見と要求」という文書で、役員会などで練りあげ、大会で発表したものです。

この七〇年代には、明示したように、多くの新

しい問題や事件が登場しています。

この時期の特徴ですが回復者や在宅患者、低肺機能患者などの問題が、しばしば記事として、掲載されるようになりま

【療養新聞】第1079号 (75.8.25)



都が収容授産施設を... 低肺病棟の運動場

患者団体による、全国患者団体連絡協議会(全患連)が

【療養新聞】第1090号 (75.12.15)

療養新聞

緊急入院ベッドを一刻も早く



低肺者が切実な訴え... いのちの問題と

歴史的な幕あけ



全国患者団体が結成... 七十年の運動の幕あけ

【療養新聞】第1089号 (1975.12.5)



豊かな医療と福祉を... 全国患者・家族集会

【療養新聞】第1173号 (1975.4.5)

結成されます。

その全患連や日患同盟

の努力が実って、七八年四月には「全国患者家族集会」が東京で開催され、七八〇人も参加が得られました。こうした経過を経て、後のことですが、

日本患者・家族団体協議会(日患協、JPC)の結成(86・6)にと、つなが

りてゆきます。

難病関係も含め、二四

団体一〇万人の患者組織

が誕生するのです。

(おわり) (寺脇 隆夫)

日本患者同盟六十八年のあゆみ (その④)

- 一九八二 健康保健法改正案(十割原則変更(昭57) 自己負担二割) 反対運動(一部修正で法案強行可決) ↓ 84・10から一割負担
- 一九八四 群馬・長寿園の廃止計画存続運動(↓86(昭59) 90年分園で存続↓94年大戸診療所開設)
- 一九八六 厚生省の国立病院・療養所の統廃合委議(昭61) 計画反対運動(↓87年に特措法案成立)
- 同 日本患者・家族団体協議会(JPC) 結成
- 一九九一 結核フォーラムを開催(於・名古屋)、以後全国各地で13回にわたり開催
- 一九九八 日患結成50周年記念レセプション開催(平10)

◆あしがき◆

「健康新聞」の歴史を 関紙の『健康新聞』も本振り返る」は、今回で打 号で刊行停止です。切り・終了です。 ご了承ください。

(編集部)

創刊号以来の機関紙

バックナンバーすべてを見ることが出来ます!

『日患情報』『療養新聞』含む、二〇一三年七月の二〇四九号までと号外関係マイクロフィルム版/日本患者同盟関係資料(第一期分) 柏書房刊行(国会図書館や大きな図書館・大学図書館で所蔵)